本殿

春日大社は、奈良時代（710–784）中期の創建以来、霊山御蓋山とともに宗教的に重要な史跡とされてきました。世界中の観光客に門戸を開いていますが、神道信者にとって神社は今も大切な祈りの場。春日大社では、およそ2,200回にもおよぶ祭礼、儀式が毎年行われています。

本殿群の中で、最も重要な場所は、大きな中央の紋のある回廊に囲まれた神聖な空間です。この中門の奥には、春日大社の四神を祀る神道の建物がそれぞれ一神ずつ四棟建てられています。この四神殿の前には、御廊があり、現在は儀式に使われ、また人々はここで四神に祈ります。古い時代より、この四つの本殿の建つ神聖な空間では神道の作法で儀式が行われていました。政府が神仏分離令を出した明治時代（1868ー1912)以前までは、御廊では仏教的作法で儀式が行われていました。

神道の伝統に則って忠実に建て替えが行われており、本殿の建築様式は千年以上にわたってその姿を残し続けています。本殿の屋根は檜皮を使っており、20年ごとに葺き替えられます。檜木の樹皮が元のようになるまで20年要するため、この葺き替えは森林にとっても神社にとっても意義のあることです。

春日大社には、61の神様が祀られており、その中で塗装を施さないままの建物もありますが、春日大社本殿は伝統的なオレンジと白に装飾されています。この朱色は四つの本殿に使われており、春日大社でのみ見られるものです。

二階建ての南門は春日大社本殿へと通じる正門です。南門の左側にある小さな門は、1250年ほど前に春日大社を創建した藤原氏専用の門で慶賀門と呼ばれます。

この本殿 では、国家安泰の宗教儀式だけが執り行われていました。しかし、江戸時代（1603–1867）に入ると、本殿は一般の人や他地域の人々でも祈りが捧げられるよう開放されました。